

照明灯

俳人の正岡子規が禅宗の悟りについて誤解していたとして、こう続けている。〈悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた〉(「病牀六尺」)。身体を自由を奪われてなお、恬淡とした中に生に執着する気概が伝わってくる▼結核性カリエスのため歩けなくなり病床に伏した子規にとって、写生に基づく作句を断念した末にたどりついたのが虚構俳句だった。神奈川大学名誉教授で小紙俳壇の選者でもある復本一郎さんは「虚構句の讃」と題し、「17音の青春2019」に書いている(同大学広報委員会編、角川書店)

▼同大学が企画し、復本さんも選考委員を務める第21回全国高校生俳句大賞の入選作を網羅した「17音の」が今年も届いた▼〈俳句はやはり文学であつて、真剣に自分の内なるものを形象化するものが俳句ではないか〉。選考座談会で語つた復本さんが最優秀賞に推した幾人かの人、愛知・名古屋高3年牛田大貴さんは詠んでいる。教科書に「奴隸の話」大西日

▼応募作は時事問題や性的少数者(LGBTなど)を主題にした句を含み、多岐に及ぶという。独自の伝統芸術に新たな息吹をもたらすのは高校生の特権だろう。